

今和次郎による初期民家調査の足跡復元 及び『日本の民家』の再評価

建築デザイン分野 A02T303 石垣 敦子

1. はじめに

本研究は、未公表である今和次郎の個人スケッチブック（現工学院大学蔵書）を用い、これまで明らかにされていなかった『日本の民家』初版の元となる諸民家調査の足跡を復元し、それらを通して『日本の民家』を再評価することが目的である。

現在、私たちが使っている「民家」という言葉を世に広め、日本の民家の古典と呼ばれる本がある。それは考現学の創始者として知られている今和次郎による日本初の民家紹介の本『日本の民家』である。この本は大正11年（1917）に刊行されて以来、五度にわたって改稿され¹、多くの人に読まれ続けてきた。この本には今の多彩なスケッチ、民家の観察記、建築的論考が収録されている。内部構成は「日本の民家」という建築的論考、「採集（絵と説明）」、「調査」の三部構成である。30年にわたって採集された六十八項の「採集」は『日本の民家』が重版を重ねるごとにまとめられ、本来の順番や意図とは無関係に北から南へと並べられている。これまで『日本の民家』に関する様々な論考があったが、今の民家研究を知るためには、諸民家調査の足跡を明らかにし、どのような時期、意図で行なわれたものかを明らかにすることが必要である。また、長期間の民家調査の中で、初版²の足跡を確認することは基本的な作業である。

2. 足跡復元

今和次郎が『日本の民家』初版までに採集した民家を可能な限り収集し、今の足跡を復元する。資料としてすでに公開されている竹内芳太郎編 今和次郎著『民家●今和次郎 見聞野帖』³（以後『民家見聞野帖』）と、工学院大学が保存している未公表の今和次郎の個人スケッチブック（以後『見聞野帖』）を用いる。『民家見聞野帖』は『見聞野帖』の中から竹内芳太郎によって選定されたものが掲載されている。

今和次郎は『日本の民家』初版を発行するにあたって全部で32の旅を行い、そのうちの17の旅において採集した民家が「絵と説明」に収録された。これが今回の原資料調査によって初めて判明した。ここでは、資料が比較的残っている特徴的な旅を中心に足跡を視覚化し、2つの基本資料中のスケッチ、日記、記述を元に今和次郎の足跡を分析・考察していく。

■**埼玉県下民家調査** 大正6年（1917）2月25日26日
この旅は今の最初の民家調査であり、白茅会⁴で行なわれた最初の旅でもある。白茅会の成果物『民家図集 第1集（埼玉県）』⁵の掲載民家とこの旅での調査民家を見

比べると、この旅で調査した民家すべてを掲載していることがわかった。さらに記述によると、その民家がすべて役場の紹介であることから、村を散策して見つけたような家でなく、誰かに紹介してもらえようような家であったことがわかる。⁶また、今後の白茅会の旅でも『見聞野帖』の記述より同じように推薦された民家を調査していることがわかった。また、この旅におけるスケッチに建築学的なものや民俗学的なものがみられるため、白茅会のメンバーである民俗学者柳田国男や建築家佐藤功一の指導を受けたことがわかる。

■**信州北部越後南部旅行** 大正6年7月20日～31日
この旅では、『見聞野帖』以外に事前調査の手帳が発見された。しかし白茅会のように採集する民家までは決めていなく、27.5キロ歩いて一つも民家を採集しない日もあった。村を散策しながら民家を探すやり方はこの調査以後今が続ける調査方法であった。また、『民家見聞野帖』の「電車の中から」と記述されたスケッチより、今は電車からの風景も意識的に民家調査に利用したことがわかる。そのため同一の往復路はとらず、別の電車経路を使ったと思われる。よって、この旅の今の足跡は円環状をとることになったと考えられる。

■**甲州街道** 大正7年（1918）7月11日
この調査では民家調査ではなく、地割、集落の生成過程を調査している。この調査は人文地理学者の小田内通敏と二人で行い、スケッチから『日本の民家』「郊外都市の生成」につながる調査をしていたことがわかった。また、既往研究では、今が小田内から人文地理学の影響を受けるのは、この後の神奈川県内郷村の調査であると述べられているが、内郷村以前に二人で地理学的調査を行なっていることもあきらかになった。

■**神奈川県内郷村** 大正7年（1918）8月15日～25日
白茅会と郷土会⁷の合同調査である。この時の調査結果は人文地理学的なものである。また、内郷村が『日本の民家』「調査」だけでなく「絵と説明」にも掲載されていることがわかった。今は同じ内郷村について言っている「調査」と「絵と説明」では反対の記述⁸をしている。そこで、今の中で「絵と説明」と「調査」の間に確実な違いがあることがわかった。

■**伊豆大嶋** 大正8年（1919）7月5日～7月10日
『見聞野帖』の記述をみると人から聞いた記述が多いことがわかる。これまで事前調査として行なっていた、その土地の人口、面積などの記述も伊豆大嶋を訪れてから書いている。つまりこの旅では事前調査を行なっていなかったことがわかる。そのため民家以外の伝承

に関する記述が多くまとめられていたのだ。また『民家見聞野帖』のスケッチより、原画には人間がいないのに『日本の民家』の図では人間が付け足されていることがわかる。人間の絵がほとんど登場しない『日本の民家』では、人間が付け足されたことになんらかの意味が含まれていると考えることができる。ここでは、調査結果に人々から聞いた伝承的記述が多いことが『日本の民家』を編集する際にスケッチに人間を付加するということにつながったと考えられる。

■四国及び紀州の旅行 大正9年8月10日～9月8日
この旅では各地で様々な人に出会っている。その名前のなかに民俗学者の南方熊楠も含まれていた。これは今回初めて判明した。また、この旅は唯一調査項目があり、小作農について調査した旅であった。『日本の民家』には調査項目について記述されていないが、「絵と説明」中のこの旅で採集された民家を見てみると、4軒のうち2軒はその土地によく見られる民家であるが、残りの2軒が貧困階級の民家であった。それは、今が小作農について調査していたからこそ、貧しい民家に眼が行き採集されたと考える事ができる。つまり調査項目によってその旅で見る民家に影響を及ぼし、さらにそれは『日本の民家』にも影響を及ぼしていると考えられる。

3. 『日本の民家』初版



図1 全体の足跡

ここでは、全体の足跡をみる。この本は日本の民家という題名であるが、図1で見られるように初版についての調査は日本全国でなく偏りがある。足跡復元より東京付近は一軒の民家にひとつの旅であり、一方地方は何軒かまとめてひとつの旅であったことが確認できた。また、東京の民家においては再訪している民家が見られることも確認した。これらより調査地域の粗密が存在していた。「調査」という項目は、東京近辺に偏った「絵と説明」をこれ以上偏らせないように作ったものであるとも考えられる。現に最終的に三つになる「調査」は神奈川県・埼玉県・東京のみである。また、図1をみてわかるように、今の民家調査は路線の周りに偏っており、電車の影響が大きいことがわかる。

『日本の民家』第四版の「初版の序」で今は
ただどしい文に筆を入れようと思ったけれど、それは無理だということがわかったのでそのままにした。

と記述している⁹ことにより、今和次郎自身、初版をただどしいと思いつつも手直しをしていないことがわかる。しかし、初版から第二版、第三版にかけて削除されたものがある。それは『日本の民家』初版の「絵と説明」で記載している民家の場所を日本の地図にプロットした図である。さらに、初版の「絵と説明」は第四版までに最終的に27個もの事例が増やされている。以上の事実をふまえると、今が採集に地域差があることを自覚していたと言ってもいいだろう。

4. 『日本の民家』再評価

複数の調査方法が『日本の民家』を編集する際に影響を及ぼしていることが旅の分析よりわかった。ここで、『日本の民家』初版に掲載されている「絵と説明」に可能な限り本来の順番を与え、並べてみる。そして、『日本の民家』中の説明を読み、その民家が今によってどのように分類されているのかを読み取り表にした。(表2)分類指標は今が民家の説明でよく用いている「その土地でよくみられる型の家」と貧困階級の家、富裕な階級の家である。白茅会が関係している初期に採集された民家は、役所に推薦されるような裕福な民家である。後半は、小作農の調査項目などの影響によって貧困階級の民家が増えていることがわかる。本来の順番にならべることによって、今のみた民家が次第に貧困階級の家へ偏っていくことがみてわかる。今は関東大震災を期に、バラック研究を始める。¹⁰しかし『日本の民家』初版のなかですでに今がバラックなどの仮小屋に惹かれていった過程をみる事ができる。



表2 注: 空白(すずれ)にあてはまらないもの
またがるものは2つの要素を持っている

5. 結論

非公開であった今和次郎の資料を用いることによって、これまで明確にされていなかった今和次郎の足跡を復元することができた。それによって、『日本の民家』は従来言われてきたような表層的なもの¹¹ではなく、今和次郎が民家調査ごとに様々な調査方法を体験し、民家の採集・実践を通して進化していったことを示した本であるということがわかった。

¹ 『日本の民家』は大正11年刊行されて以来、五回異なる版が刊行された。
初版『日本の民家-田園生活者の住家-』 鈴木書店 大正11年(1922)
二版『日本の民家』岡書院 昭和2年(1927) 三版『日本の民家』相模書房 昭和18年(1943)
四版『日本の民家』相模書房 昭和29年(1954) 五版『日本の民家』岩波書店 昭和64年(1989)
初版では「採集」は「絵と説明」である。
² 竹内芳太郎編 今和次郎著『民家』今和次郎 見聞野帖 柏書房 1986年
³ 白茅会:大正6年(1917)、古い民家の保存を目的として組織された。民家研究の第一歩。
⁴ 白茅会著『民家図集第1集(埼玉県)』洪洋社 1918年
⁵ 例えは、『見聞野帖1』p.1日記より「比企郡役場で休息。群書記の案内にて高坂に至る。」
⁶ 郷土会:明治43年(1910)から新渡戸稲造の自宅で開かれていた研究会の名称。この研究会の幹事が柳田国男であり、他に石黒忠篤、小田内通敏らを中心に、佐藤功一など多彩の参加者があった。
⁷ 「絵と説明」では、「立派な入り母屋造りの屋根が特徴的であり、見事なものである。また、壁がぞんざいに板を打ち付けたままになっているが、男性的立派な整いご発揮している」、一方「調査」では「屋根が立派に発達した伝統的入り母屋造りになっているにもかかわらず、手入れがぞんざいである。」と述べている。
⁸ 第四版『日本の民家』「新版の序」p.15
⁹ 川添登『今和次郎 その考現学』など多くの既往文献に見られる。
考現学以前の考現学の先駆となる研究と言われてきた。
¹⁰ これまで建築学や民俗学の専門家には中途半端であると批判されてきた。